

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 31 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520547

研究課題名(和文) 日本語史研究における抄物資料の活用促進のための研究

研究課題名(英文) Promotion of Making More Use of the Sho-mono Material in the Historical Study of Japanese

研究代表者

坪井 美樹 (TSUBOI, Yoshiki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40114300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世後期日本語資料である抄物資料について、より多くの日本語研究者による利用を可能ならしめるために、抄物資料成立の場や状況、その言語の性格を解明し、一般にわかりやすく共有できる情報として提供することを最終目的とした。その目的を達成するために、次の3つのステージにおける研究活動を行った。(1)抄物成立の場の具体的状況を記述し仮名抄の口語性の強い文体形成の基盤を論じた。(2)抄物資料中のオノマトペの役割や授受表現の用例の分析を通して抄物における講述文体の口語性の特質を論じた。(3)報告書の作成や海外での講演を通して抄物資料利用の促進を図った。

研究成果の概要(英文)：The sho-mono material is very important and useful for the historical study of Japanese. I aimed to promote more use of the sho-mono material in the historical study of Japanese. To achieve this goal, I investigated the process of making some sho-mono texts and the nature of their language. My activities in this study are summarized as follows: (1) I investigated into the lectures given by zen-monks and argued about the origin of the colloquial style of the sho-mono texts. (2) I examined the onomatopoeias and the benefactive expressions in the sho-mono texts to investigate the character of colloquialism in the sho-mono material. (3) I made the reports on the sho-mono material and gave the lectures at the overseas academic conferences to promote of making more use of the sho-mono material in the study of Japanese.

研究分野：日本語史

キーワード：中世日本語 抄物資料 口語性 近代日本語の特質 授受表現 国際情報交換(中国、韓国)

1. 研究開始当初の背景

抄物(しょうもの)資料は、古代日本語が近代日本語に転換する時期における口語性の高い資料として夙に注目されてきた。しかし、量・質両面における資料としての豊かさに比して、日本語史研究における抄物資料の利用は未だ不十分であると言わざるを得ない。抄物文献・中世日本語に関する専門的研究者を除いた他の多くの日本語研究者は抄物資料をその研究に活かしきれていない。

この不十分な状態の原因は、主に次の点にあると考える。即ち、抄物資料がどのような場でどのように成立するのか個別の抄物文献によって多様で不明瞭なために、その言語の性格がつかみきれないのである。抄物資料の複製出版は、他の日本語史資料と比べてむしろ多い方と断言していいのではないだろうか。専門的研究者による抄物資料の網羅的研究・精密な解説も決して少ない数ではない。にもかかわらず日本語史研究における抄物資料利用の相対的低調、一般の日本語研究者がいわば「及び腰」でしか抄物資料に接し得ない現状を打破したいと考えるのである。

また、漢籍・漢詩文・仏典の講釈である抄物資料が、中国語言語文化の日本語言語文化への受容の一形態として生まれたものでもあることを考えると、中国や韓国の日本語研究者・言語研究者にも抄物資料研究への参画が望まれる。将来的には国際的な共同研究を生み出すための基盤整備も必要である。

本研究課題の研究代表者(坪井)は、かつて『三体詩幻雲抄』の影印複製本(中田祝夫編抄物大系所収、1977年勉誠社刊)の解説を執筆しており、爾来抄物の資料性や成立に関する論考と抄物資料に見られる語彙や文法事象に関わる論考を合わせて十数編発表している。近年は、活用体系の歴史の変遷に関する研究を進めてきたが、活用体系史研究においても、中世後期における文献調査は必須であり、常に抄物資料からの用例を重要な証拠として取り扱ってきた。

このような自らの研究履歴の上からも、先述の日本語史研究全体の状況からも、現時点で、抄物資料の日本語史資料としての特性に関する基礎的知識を検証・深化し、日本語史資料としてこれまで以上に広範囲に多くの研究者(日本国内の研究者のみならず海外の研究者も含めて)が取り扱えるような整備された情報として学界に広く提供されることを願い、本研究課題に取り組むものである。

2. 研究の目的

本研究は、抄物資料成立の場の具体的状況とそのテキスト上の講述調文体の持つ口語性の特徴を明らかにすることを通じて、

中世日本語史資料としての抄物文献の意義と取り扱い方を明確にし、広範囲な日本語研究者に対して情報提供することによって、日本語史研究における抄物資料利用の容易化と拡大を実現することを目指したものである。

前項(1. 研究開始当初の背景)で述べたように、抄物資料は、中田祝夫編『抄物大系』、岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成(正・続・新)』、高羽五郎編『抄物小系』、駒沢大学文学部国文学研究室編『禅門抄物叢刊』、その他多くの抄物文献が複製出版され、一部の抄物の索引も作成・公刊されている。そのため、複製によって目にすることは比較的容易な文献資料であると言ってよい。

また、基本的な書誌学的研究としては、それぞれの複製本における解説があり、とりわけ、柳田征司『室町時代語資料としての抄物の研究』(1998刊、武蔵野書院)という優れた網羅的研究が既に存する。したがって、資料の学界への提供という点では、抄物資料を利用する日本語研究にとっては恵まれた状況にあると言える。また、抄物資料が日本語史研究のために極めて重要なものであることは学界の共通認識となっている。

それにもかかわらず抄物の日本語史資料としての利用は不十分であり、そのような現状を打破し、抄物専門家以外の広範囲な日本語研究者にもその利用を容易にするための起爆剤が必要である。本研究は、期間内の研究計画に抄物資料内部の言語事象の調査・考察を含むが、その言語事象の語彙的ないし文法的研究それ自体を最終目的としていない。

本研究は、抄物資料の特質に関する情報を広範囲な日本語研究者にわかりやすく提供し、以て抄物資料による日本語史研究の進展を促すことを最終目的とする研究である。狭い専門領域内部への学術成果提供ではなく、より広範囲な研究領域への研究成果の還元と日本語史研究への導入(道案内)を企図するものである。

3. 研究の方法

本研究では基本的に下記の3つの段階(stage)を経て、最終目的に至ることを期した。

(第1段階)

抄物成立の場の具体的状況を解明する。「具体的状況」とは、漢籍・禅籍等に対する講述が実際に行われる場合の講述者・聴聞者・場所・講述の実態等、また、取り合わせ抄物(集成抄物)の場合は、編集者と被引用者との関係・原典と引用文との対比・編集方針の実態・利用法等である。抄物がどのようにして作られたかを可能な限り具体的に記述する。

(第2段階)

抄物における講述調文体の口語性の特質を解明する。第1段階で得た基礎的知識を踏まえ、抄物資料の言語の性質の考察に進む。抄物資料が評価される点はその口語性の高さにあるが、しかし、たとえ聞き書き抄物といえども純粋な口述筆記ではない。抄物における講述調文体がなぜ必要とされたか、なぜこのような口語的な形で成立したかを、抄物が基本的に「漢籍や禅籍の解説」であることを縦軸に、抄物「特有」の語彙・文法事項の分析を横軸として考察を加える。

(第3段階)

日本語史資料として抄物に関する基本的情報(成立のしかた、講述調文体の性質)を、一般の日本語研究者にわかりやすい情報系として整理し、抄物資料の日本語史資料としての利用のしかたをまとめる。これまでの抄物に関する専門的研究そのものが、一般の日本語研究者にとって、難解で取り付きにくいものになっている現状を打破し、中世日本語研究ないし日本語史研究のさらなる隆盛と進展を促す。

4. 研究成果

本研究は前記(2. 研究の目的)のような意図をもって取り掛かったものであるが、本研究課題の期間中に本研究課題と同様の問題意識のもとに作成された、或いは、問題意識・意図は異なるかもしれないが、本研究課題代表者(坪井)の持つ問題意識に答えてくれる優れた研究成果が続いて公表された。

一般向けの解説ともなっている抄物の資料性の解明としては、柳田征司によって『日本語の歴史3 中世口語資料を読む』『同4 抄物、広大な沃野』(それぞれ2012年5月、2013年4月武蔵野書院刊)が刊行された(なお、同著者の『日本語の歴史』シリーズの他の巻々も抄物資料を日本語史研究に活かす恰好の実践例となっている)。

また、抄物資料の口語性を解明し、日本語の口語ないし口語文の歴史の中に位置づける作業としては、野村剛史によって『話し言葉の日本史』(2012年1月吉川弘文館刊)『日本語スタンダードの歴史 ミヤコ言葉から言文一致まで』(2013年5月岩波書店刊)が刊行された。[※紹介した野村の両著は抄物について触れる部分はそれほど多くはないが、野村には「抄物」の世界一室町時代の言語生活(東京大学教養学部国文・漢文学部会編『古典日本語の世界 漢字がつくる日本』所収。2007年4月東京大学出版会刊)もある。]

本研究もこれらの優れた研究の成果を受けながら同時進行的に自らの研究を前記(3. 研究の方法)に記した構想を修正しつつ進めることとなり、特に当初の構想の3つの段階のうち第3段階の研究はほとんどを将来的課題として残すこととなった。

本研究の成果は、次の3点にまとめられる。

(1) [抄物成立の場の具体的状況の解明] 文明3年(1471)から文明5年(1473)にかけて遠江国一雲斎で行われた、曹洞宗の僧、川僧慧済による禅籍『人天眼目』(中国禅宗各派の教義等を解説した著)講義の記録である『人天眼目抄』の諸本のうち東大史料編纂所本を主たる資料として精査を加えた。人天眼目講義の実態を具体的に記述し、師家(=講師)と学人(=聴聞者)との問答の記録を伴う禅書講義抄物が、仮名抄の口語性の強い文体が形成される基盤の一つとなったという考えを提示した論文「抄物が生まれる現場(商量を伴う場合)―東京大学史料編纂所蔵本『人天眼目抄』を例として―」を発表した。

(2) [抄物における講述文体の口語性の特質の解明] 抄物資料中の口語的語彙や口語的表現の用例を蒐集し、各抄物テキスト間の比較だけでなく、月舟寿桂編纂による『三体詩』諸抄集成と言える『三体詩幻雲抄』(1527成立)のような取り合わせ抄物における引用抄文中の語形や用法の比較を行った。抄物資料中のオノマトペが講述における〈注釈語〉としての役割を果たしている実態(講述対象である漢詩文中にある中国語オノマトペを日本語オノマトペに置き換えているわけではなく、学習者に漢詩文の理解を促すために「生きた注釈語」として能動的・オリジナルに日本語オノマトペを使用している)を指摘した論文「抄物資料におけるオノマトペの役割」、及び、抄物資料の言語が近代日本語における授受表現体系発達の初期資料として有用であることを論じた「古代日本語から近代日本語への変化―現代日本語の特質の形成(授受表現の発達を例として)―」を発表した。

(3) [抄物資料利用の促進] 研究代表者(坪井)の既発表論文や大学での講義ノートをまとめた2冊の研究報告冊子(『日本語史資料としての抄物資料の特性に関する考察―講述の現場とその伝承―』及び『抄物資料と中世日本語研究』)を作成し、専門領域外の若手研究者等に配布した。また、海外(韓国、中国)の研究者・学生(日本語史の専門的研究者だけではなく日本語教師志望者や日本文化学習者を含む)を対象に日本語史研究における抄物資料の重要性を実際の研究事例に添って紹介する講演を計3回行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

①坪井美樹、抄物が生まれる現場(商量を伴う場合)―東京大学史料編纂所蔵本『人

天眼目抄』を例として一、筑波日本語研究、査読有、18号、2014、1-15

- ②坪井美樹、抄物資料におけるオノマトペの役割、筑波大学大学院人文社会科学研究所 文芸・言語専攻紀要「文藝言語研究言語篇」、査読有、61号、2012、pp. 147-158
- ③坪井美樹、古代日本語から近代日本語への変化—現代日本語の特質の形成（授受表現の発達を例として）一、韓国日本語教育学会「日本語教育」、査読無、59輯、2012、pp. 1-8

[学会発表] (計 3件)

- ①坪井美樹、抄物資料と中世日本語研究—抄物資料の口語性に焦点を当てて一、第3回北京師範大学・筑波大学学術交流会、2015. 3. 14、中国（北京）・北京師範大学
- ②坪井美樹、日本語における敬語表現と授受表現の歴史的変遷、第2回北京師範大学・筑波大学学術交流会、2012. 12. 15 中国（北京）・北京師範大学
- ②坪井美樹、古代日本語から近代日本語への変化—現代日本語の特質の形成（授受表現の発達を例として）一、韓国日本語教育学会第54回学術大会、2011. 9. 24、韓国（光州）・朝鮮大学校

6. 研究組織

(1)研究代表者

坪井 美樹 (TSUBOI, Yoshiki)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：40114300